

人間とレジャー 3

レジャーと 企業

人間とレジャー 3

レジャーと 企業

石川弘義 編

日本経済新聞社

人間とレジャー 3

レジャーと企業

昭和48年11月20日 印刷
昭和48年11月30日 発行

1000円

編 者 石 川 弘 義

© Hiroyoshi Ishikawa 1973

発行者 佐 久 間 央

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町1-9-5 〒100

電話 (03) 270-0251 振替 東京 555

印刷 東光整版印刷・製本 トキワ製本所
(分)1336(製)8118(出)5825

編者・執筆者紹介

石川 弘義 (いしかわ・ひろよし)

1933年生まれ。一橋大学社会学部卒業。
成城大学助教授。社会心理学専攻。

松原 洋三 (まつばら・ようぞう)

1938年生まれ。京都大学文学部卒業。
立教大学助教授。余暇社会学専攻。

藤本 武 (ふじもと・たけし)

1912年生まれ。東京大学経済学部卒業。
労働科学研究所研究部長。経済学博士。

梅沢 正 (うめざわ・ただし)

1935年生まれ。東京大学文学部卒業。
桃山学院大学助教授。産業社会学専攻。

大野 力 (おおの・つとむ)

1928年生まれ。桐生工専卒業。経営評
論家。

三島 彰 (みしま・あきら)

1924年生まれ。東京大学法学部卒業。
現代構造研究所所長。評論家。

はしがき

「人間とレジャー」シリーズの二回目としておとどけする巻である。

前回の「レジャーの思想と行動」で、私たちが問題にしたのは、レジャーとは何なのか、とくに日本人にとってレジャーとはいったい何なのであり、また何であったのか、ということだった。

今回の「レジャーと企業」では、私たちはレジャーを「企業」あるいは「仕事」との関連で検討することを考えた。

そうしてこの問題を私たちは以下のような角度から洗いなおすという作業を試みたのだった。「仕事とレジャー」、「労働時間」、「レジャーと企業」、「余暇管理」、「レジャー・ビジネス」。

レジャーと仕事、レジャーと企業——これはレジャーについて考えようとするときにはどうしても必要な視角である。しかし、それは「レジャーの思想と行動」でもふれられているとおり、言ってみれば古くて新しい問題点である。さまざまな角度からさまざまな問題提起がなされるのはむしろ当然だし、従って何かそこに共通した結論のようなものを発見しようと思っても、それはそもそも無理と言うものだろう。

この巻をお読みななれば明らかになることだが、ここに執筆していただいた諸氏の主張や問題へのアプローチには微妙なズレあるいはくいちがいがある。レジャーから仕事を見る、仕事からレジャーを見る、あるいはビジネスからレジャーを見る、というようにそもそも見る角度がいろいろあるわけ

だから、ズレやくいちがいが生じてくるのはむしろ当然と言うべきだろう。そうして、このような微妙な部分こそ、レジャーあるいは仕事についてつきつめて考えようとする読者諸氏にはきわめて大きな刺激となるのではないのか。この巻の編者としては、まえの巻を編集する仕事の延長という意味をも含めて、是非このことを書いておきたいと思う。

なお、最後に編者のおわびを一つ。このテーマはまことにまじめにくだいものであった。そのため章によつてはなかなか執筆者がきまらないということがあった。執筆者のほうにも書きにくいというような事情もあつたようである。その結果一部の執筆者の方々には、原稿を書き上げてから刊行まで長い間待っていた、というようなことも出来てしまった。

この不手ぎわについて、この場所を借りておわび申し上げたい。

一九七三年十一月

石川弘義

目次

仕事とレジャー 松原洋三

I 問題の背景	9
II 仕事とレジャー——その位置づけをめぐって——	19
III 仕事とレジャー——そのあり方をめぐって——	46

労働時間 藤本 武

はじめに	95
I 労働時間と余暇	95
II 労働時間短縮の発展	99
III 労働時間の現状	112
IV 週休二日制	124
V 年次有給休暇・夏季休暇・有給休日	132
VI 今後の問題	143

レジャーと企業 梅沢 正

I	レジャーと生産性	159
II	時短と生産性	163
III	レクリエーション施設の設営	171
IV	生産性向上の人間の側面	174
V	職場は砂漠か	179
VI	職場の現代的諸相	182
VII	レジャー欲求の実情	187
VIII	レジャーを与える企業の心	192
IX	レジャーの効用	197
X	仕事への献身	204
XI	個人の活性化	208
XII	まとめとして	214

余暇管理 大野 力

I	その特質——“自由”を“管理”する	221
---	-------------------	-----

II	その動向——福利対策から参加体制へ……………	228
III	その構造——職場づくりへのステップ……………	238
IV	その展開——自発性と生産性の結合……………	250
V	その展望——浸透する職域家庭主義……………	264
転換期のレジャー・ビジネス		
	三島 彰	

I	マーケットの質的変貌……………	287
II	裏切られつつある通説……………	296
III	テクノロジーとレジャー・ビジネス……………	314

仕事とレジャー

松原洋三

I 問題の背景

最近、社会の各方面で「生活の質」(Quality of Life)が問題にされ、人間らしい生き方が真剣に模索されている。基本的には、「仕事とレジャー」というのは、人間の生活全体のあり方の問題であって、人間の全体性と個性を生かしながら、どのような社会をつくっていくのかという大きな課題に直結したテーマである。それを個人の側からいえば、「仕事とレジャー」を含めた生活全体のなかで、いわば自分をどう生かしていくのか(自己実現)、自分がどう生きていくのかという生き方の問題であるといえるだろう。

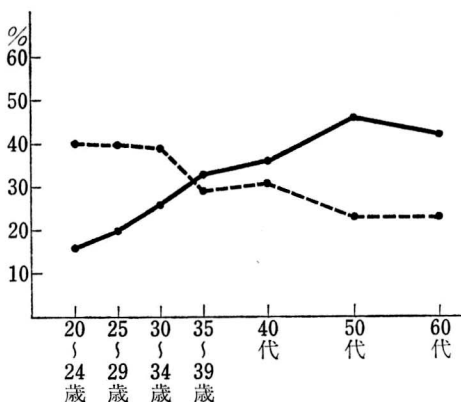
生き方といえば、かつて、ドル・ショックを誘発したニクソン演説の直後に、次のような質問をしたことがある。A「日本は豊かになったので、そろそろあくせく働くより、生活を楽しむことに力を注ぐべきだ」、B「日本はもっと豊かにしなければならぬので、まだまだ生活を楽しむより、一生懸命働くことに力を注ぐべきだ」——このA・B二つの意見のうちあなたの考えはどちらに近いか、というのがその質問である。当時、ドル・ショックを契機にして、われわれが世界の驚異といわれるほど一生懸命働いて、輸出を伸ばし、急速な経済成長をとげてきたのは、一体何だったのかという深刻な反省がまきおこっていた。外貨を急速に獲得しすぎたといったことだけでなく、欧米先進国から

日本人はゆとりがない、働きすぎだ、さらには、競争がフェアでないアンフェアだ——日本人は低い賃金で長時間働いているのに対して、われわれは週休二日制、三日制、あるいはバカンスといったゆとりのある条件で国際競争に臨んでいる——といったかたちで、日本人の働き主義が白い眼でみられ、エコミック・アニマルなどといわれるような現象が出てきていた(その中には、多分に日本人自身が自分たちのことを自虐的に語っているという風潮もみられた)。他方、国内でも、急激な工業化の進展がもたらした「生活の質」の問題、都市的な生活環境の悪化であるとか、産業公害、都市公害、交通戦争、ゴミ戦争、自然破壊、その他社会的厚生にかかわる諸問題が山積し、*「くたばれGNP」*とまではいわないまでも、経済成長第一主義に対する疑いのムードが深くひろがりはじめていた。

そのような事情を反映して、この質問をおこなった当時は、いわゆる識者の間でも議論が二つに分かれていた。経済成長第一主義、効率第一主義、勤勉第一主義でやっていくより、もうそろそろ人間らしいゆとりのある生活の充実に意を注ぐべきだというのが一方の見解であり、いやまだまだこれらが大変なことになるのだから、勤労精神を失ってはいけない、日本人の勤勉さというのは非常に大切な資質であり、ますますそれを伸ばしていかなければならないというのが他方の見解であった。こうしたことに対して、一般の人びとはどのように感じているかを、余暇観に関する全国調査の質問のひとつとして調べてみようというのが、先ほどのA・B、二つの意見を含む質問の意図であった。

その結果は——A「そろそろあくせく働くより、生活を楽しむことに力を注ぐべきだ」(四四・〇%)、B「まだまだ生活を楽しむより、一生懸命働くことに力を注ぐべきだ」(四五・一%)、どちらともい

図1 「生活を楽しむ」と「働くことに力を注ぐ」



(注)……「そろそろあくせく働くより、生活を楽しむことに力を注ぐべきだ」

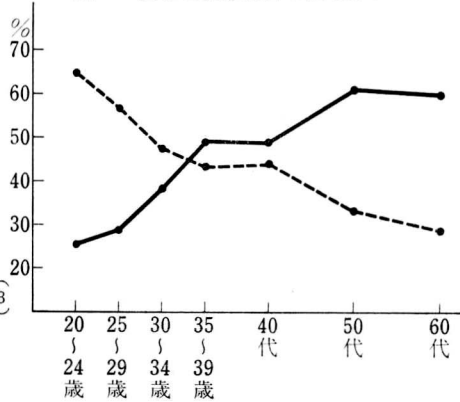
——「まだまだ生活を楽しむより、一生懸命働くことに力を注ぐべきだ」

ない(九・一%)、DK・NA(一・八%)と、A、B、二つの見解が、一般の人びとの場合も、ちょうど半々、まさに二分されたのである。

しかも、全体として半々にわかれてくるだけでなく、これら二つの意見には、非常にはっきりした世代差がみられた。図1にみる通り、ほぼ三十五歳を境にして、それより若い世代に属する人たちは、Aの意見を支持するものが多く、三十五歳以上の人たちは、Bの意見を支持するものが多い。とくに、二十代の若い世代は圧倒的にAの意見を支持し、逆に五十代と六十代の人たちは圧倒的にBの意見を支持している点が注目される。

この結果は、「余暇観」の調査でえられたものだが、これとよく似た傾向が「職業観」の調査からもえられている。⁽²⁾図2は、仕事と仕事以外のどちらに生きがいを感じているかという質問で、仕事の方に生きがいを感じる人びと(三二%)と、どちらにも同じくらい生きがいを感じている人びと(三二%)の割合を年齢別にみたものである。この場合も、二十代と三十代の前半では、仕事の方に生きがいを感じる人よりも、仕事以外の生活にも生きがいを感じる人の方が

図2 仕事と仕事以外の生きがい



(注)——「仕事の方に生きがいを感じている」
「どちらにも生きがいを感じている」

は、はてしない議論がありうる。ただし「職業観」調査では、仕事一辺倒という伝統的な勤労観に対して、仕事一辺倒ではない考え方が、近代的な職業に従事している人に多くみられることをあわせて検証し、時代経験的な「世代」の違いに傾斜する分析をおこなっている⁽⁴⁾。

ところで、最近、とくに若い世代、若者の価値観の変貌ぶりがとりざたされている。最近の若者は、外国人と思えばちょうどよい、異人種なのだというのからはじまって、若者の昇進意欲の減退であるとか、会社帰属意識・組合帰属意識の減少であるとか、残業忌避・休日出勤の拒否であるとか、

多いが、三十五歳ごろを境にして、仕事に傾斜する人びとが多くなりはじめ、五十代以上では完全に多くなっている。どうやら、三十五歳というのは特別の意味をもっているらしいのである。ほぼ三十五歳を境にして、年齢の高い層は仕事に傾斜しているのに対して、年齢の低い層では仕事以外の生活にもか
 なるの関心をみせ、なかでも若者の間ではレジャー志向性が強いという傾向は、各種の調査結果から読みとることができる。このような傾向がライフサイクル的な「年齢」の違いに基づくのか、時代経験的な「世代」の違いに基づくのかという点をめぐって

その他転職、脱サラ、脱組織化現象、就職離れ現象等々がならべられる。

たしかに、今の若者には特別えらくなりたくはないというムードが強いし、会社は人生のすべてではないという見方がひろがっている。また、状況しだいですぐ転職するし、残業や休日出勤は好まないし、職に就くことすらできるだけ引きのばそうと試みる。これらに対して、昇進意欲がないのではなく偉くなる自信がないのとか、昇進拒否の思想というより「精進拒否」の思想とか、努力しようとしなやか、積極性がないとか、計画性に欠けているとか、疎外論に毒されているとか、さまざまなことがいわれている。

しかしながら、このような状況を生みだしている背景としては、その底流に「自己の存在証明」(self-identity)を求める若者の姿を考えるべきではないだろうか。若者は、いつの時代にあっても、生理的・心理的・社会的にきわめて不安定な状態におかれており、青年期に特有の根源的な問いに悩みながら、生きる意味を求めて揺れ動く「境界人」(marginal man)でもある。こうした状況がでてくるのは、一方で、ライフサイクル上の青年期という時期に特有の現象であると同時に、他方で、良しにつけ悪しきにつけ、物質的な意味での豊かさの増大という時代的な特徴がもたらした結果でもある。その意味では、このような現象を生み出したのは、ほかならぬ高度成長そのものであり、豊かさの増大の必然的な結果だともいえる。豊かさの中に生まれ、育ってきた若者たちには、失業の不安もなければ食べるために働いた体験もない。労働力市場の変化もあって、ただ生きていくためだけだったら求人先はいくらでもある。別に、きちんと就職しなくとも、臨時の仕事はあまるほどある。現代